Stanley Robertson の自伝小説 *Exodus to Alford* における スコティッシュ・トラベラーの自己表象

立命館大学 文学研究科 人文学専攻
英語圏文化専修 博士課程後期課程
山﨑遼（Yamasaki, Ryo）

スコティッシュ・トラベラー（以下トラベラー）は、スコットランドの人口の 0.5%弱（1.5–2 万人）を占める少数民族である。スコットランド国内では彼らに対する偏見や差別が蔓延しており、ステレオタイプに基づく報道が多数であることが原因として指摘されている。一方、トラベラーは 1970 年代から自伝や伝承物語集を約 40 作出版しており、著作を通してイーミックな世界観や価値観を発信してきた。著作におけるトラベラーの自己表象を明らかにすることで、トラベラーの公正なイメージを提示できると共に、彼らに対する理解を深める一助になることが期待される。

そこで、本研究は代表的なトラベラー作家 Stanley Robertson（1940–2009）の自伝小説 *Exodus to Alford*（1988）に焦点を当て、そこで作者がトラベラーやその文化をどのように提示しているかを解明する。本書は 1946 年の夏の移動生活について綴ったものであり、移動生活という大きな物語の枠の中でトラベラーたちが計 34 話の物語を語るという「枠物語」の技法を採用している。分析に際し、本研究は民俗学と文学研究の理論・方法論を併用する。一次資料の *Exodus to Alford* には物語論に基づいたテクスト分析を行い、二次資料として 2017 年 4–9 月に行った Robertson の親族・友人へのインタビューを用いる。

Exodus to Alford における外側の枠（第一次物語言説）では、トラベラーの（1）「移動生活」と（2）「物語る伝統」という二つの主要なトラベラーの伝統が紹介される。一家は冬の間アバディーン市街で過ごしたが、そこでは様々な差別的待遇を受けた。そのため夏の移動生活は、街から逃れてトラベラーのアイデンティティを再確認するための脱出（“exodus”）であった。そして旅の間、彼らは毎晩キャンプの火を囲んで物語を語る伝統を持っていた。第一次物語言説には、移動生活と物語る伝統は表裏一体であり、互いを補完しあう関係であるという作者の信条が表れている。

一方でトラベラーたちが語る物語（第二次物語言説）からは、彼らが伝統的に物語を通して伝達していた様々なトラベラーの世界観が読み取れる。本研究が抽出したのは（1）先祖との繋がりを再認識させる独特の「郷土史」、（2）民間信仰とキリスト教の信仰を融合した独自の「信仰体系」、（3）模範的なトラベラー像にまつわる「倫理観」である。「フォークロアの機能」の観点から見ると、これらの物語はトラベラー文化を保存・継承するという役割と、異文化（定住民の社会）との交渉術を教授するという機能を有していると考えられる。

本書でトラベラーは「語りながら旅する民」であると表象されており、そこで語られる物語はトラベラー文化の中核を成す世界観や価値観を提示していると本研究は結論づける。